『格闘学園』　最強男子の転落

玉子王子　著

一章　よろよろ勝者

「Ｓランク総合ランキング四十八位、白浜選手」

　廊下。

　正拳学園、高等部の廊下である。

　名前を呼ばれ、拳を突き上げる体操服のロングヘアー美少女、白浜綾子。重い。腕ではない、乳房だ。腕を上げたのにつられて大仰に揺れるのに、周囲の男子らの目が引き付けられるのを綾子は見逃さない。

　――ああ、この目が嫌。服の下まで見られてるような感じがして。

　幼いころは腹のほうが出ているよくある幼女体型だったが、中学に入るや一挙に成長し始め、十七歳の今ではスイカのよう。

　走るだけで揺れる。

　いや、歩くだけで揺れる。

　いや、もはや立っているだけで**心臓の鼓動で揺れる。**

　もちろんそれは被害妄想。実際そこまではいかない。歩くだけで揺れる程度。

　それでも、そんな風に綾子は気にしてしまう。

　ボクシング気味で、頭をあまり下げない総合格闘技の構え。

　家が総合格闘技のジムをやっているので幼いころから学んできた。

　ここで、正拳学園でも総合格闘部に所属している。

「男子Ｂランク、六十位有坂選手」

　呼ばれて、拳を突き上げる男子。

「えー、男子？」

「ルール上はありだけど、酷い話だよねえ」

　廊下の端に移動し、選手二人から離れる生徒たち。

　その中の一部の女子が眉をしかめていた。

　その横を歩く少し年下の少女が不思議そうな顔をする。

「でも、相手の人、Ｂランクですよね？」

「一年生？　いやいや、女子のＳランクなんて」

「Ｓランクは男女混合ですよね？」

「あは、そりゃそうなんだけど……Ｓランクは男女半々じゃない？　五十人ずついてさ。で、あの白浜が女子の中ではトップなの。つまりどういうことかというと……」

「え？　Ｓランクの女子トップが、総合で四十八位？」

「そう。Ｓランクの男子五十人のうちで、あの子の下は三人しかいないの。百人の男女のうち、男子が四十七位まで独占で、四十八がやっと女子トップの白浜。で、そのあと男子が三人で……ようは、女子のトップ五十人が、男子トップと当たったらほとんど全敗、ギリギリあの子だけちょっと勝ってるけど、まあ最下位のグループよね。いや、まああの子がＳランクの真ん中あたりではあるんだけど

……つまりは、男強すぎってこと」

「そ、それじゃ……いや、でもＡランクならまだしも、Ｂでしょ」

「そりゃそうなんだけど……」

「背も、男の人なのに白浜先輩より低いし」

「Ｓランクトップの西園寺も平均より低いからね。って、まあ関係ないけど」

　なんとなく聞いている白浜。

　近くの男子の話も聞こえる。

「有坂せこいな」

「女子になんか勝てるに決まってんのに」

　胸がギュッと締め付けられるのを感じる白浜。

　――有坂がせこい……って、私が女だから有坂より弱いに決まってるって前提がないと出てこない言葉。思い切り見下してきてる。有坂もこいつらも変わらない。でも実際、勝てるかわからないと思ってる自分が嫌。でも、男と女じゃそれだけの差があるのは事実。受け入れて、戦わないと。私だって、こいつより強いＳランクの男三人には勝ったんだから。

「いや、でも白浜って、三人には勝ってんだろ？」

　スルーされるかと綾子が思っていたことを、あっさり口にする男子。

　だが、もう一人はあっさり首を振る。

「女相手に本気も出せないからな、ヘタ打つこともあるって。実力じゃそんなもん……」

「だよな。所詮女。男に勝とうと思ったら……そりゃもう、玉狙うしかない」

「ぎゃははは」

　歯を食いしばる綾子。

　――ふざけてるわこんなの。でも、こいつらの言ってることは本当……。格闘技やってる女の子が、特になにもやってない男に、腕力や頑丈さに押し切られる。私に負けた三人も、なんか遠慮がちだった。っていうか、ほかの子たちも大体そんな感じだけど、それでも私は勝てない。ほかの子たちも全然……体の構造が違う。男と女じゃ。

　思いつつも、目の前の試合に集中する。つい考えてしまうが、振り払って集中する。

　有坂は背は高くないが、一様ボクシングをやっている。構えでわかる。

　試合が始まる。

　大したことのないパンチを連打する有坂。所詮、Ｂランク。

　かわしつつ、撃ち返す綾子。お互いオープンフィンガーグローブ。この学園の生徒ならみんな持っている。

　バシ、と顔を捉える。いいパンチだ、だが頭を揺らすには至らない。首が固い。筋肉が強い。いや、骨が強いのか。

　何発も打つ、腹、硬いような柔らかいような感触。肩、固い。

　有坂も反撃してくる。大体は避ける、が、全部は避けきれない。

　顔を狙ってくるのを、腕でブロック。

　ハンマー。

　相手の手が急にハンマーに変わったかのような衝撃を感じる。

　下がりつつ、痛みより悔しさを感じる綾子。

――これが男の打撃。嫌になる。全然大したことない奴なのに。筋肉とか、体の硬さとかで、鈍器みたいなパンチを……

よろけつつも、何とか立ち直る。

総合だ、蹴りもある。前蹴りで腹を蹴り、突き放す。

ふと、目が相手の体操服の足の付け根、膨らんだ部分に行く。

――ここ、蹴っちゃえばかなり有利……なんだよね？　弱点なんだよね？

男兄弟無しで、巨乳美少女ながら完全な処女の綾子にとってそこはひどく縁遠い、関係ないものに思えた。それでも、一様男の急所だということは知っている。

総合格闘技は試合を想定したもので、急所攻撃は当然ご法度であるが、ちょっと下を狙って前蹴りすればぐにょっといきそうなことは想像に難くない。

だが、正拳学園の試合においては当然急所攻撃は禁止。

わざわざ頑丈な所を蹴る不条理を感じている余裕はない。

突き放されても、かまわず突っ込んでくる。大して効いていない。

――これがＢランク！　男子のＢは女子のＡより明らかに強い……

Ｓランクだけ合同で、他のランクは男女別々だ。ただし、それはリーグ戦での話。

順位を上げるために任意で行う試合は男女混合だ。

ランクが上の人間は挑まれたら一日一回までは基本は受けねばならない。

ランクが上の人間ほど倒せば順位を上げるためのポイントが多くもらえる。

そのため、綾子のようにランクが高い女子は、ランクアップを狙う男子の格好の標的だ。

――標的？　カモ？　私が？　男ってだけで、力が強くて頑丈な素人みたいな連中に、ボーナスキャラだと思わてる？　ふざけてるわ。

有坂のパンチ。手で払う。痺れてくる。

もう無理か、と思える。だが諦めない。

顔を狙って右ストレート。

ダッキングという、しゃがむ動きでかわす有坂。拳が頭上をかすめる。

不用意である。

ボクシングならいいが、相手が蹴りを使ってくるなら、膝蹴りを食らう体勢だ。

――もらった！

頭を押さえる。ゴチャ、と顔面に膝。

鼻が潰れ、血が噴き出す。

勝った、目を輝かせる綾子。

しかし、有坂はわめいてさらに突っ込んでくる。

「きゃっ！」

大ぶりのパンチ。どうにかブロックするが、そのまま弾き飛ばされる。

廊下に倒れる綾子。

鼻血を手首で拭きながら、見下ろす有坂。

「へへへ、男の蹴りだったら、今ので終わってたんだろうな。でも、軽いから何とかなるぜ」

「綾子選手、まだやれますか？」

　レフェリー兼実況の女子生徒。

「くううう、や、やれる！」

　頭を振る綾子。何とか立ち上がる。

　唇を噛む。

　――悔しい、こんな……膝蹴りしてくる相手にダッキングする、クソ素人が……

　腰に手をやり、突き出す。

　何も考えていない体勢。

　それでも、綾子はついその足の付け根を見てしまう。

　――こんな、ここに変なモノついてるってだけで、体の出来が違って、頑張って訓練してきた私より強いなんて……そんなの許せない。私は女子のトップ、こんなのに負けてたら、女子皆がこいつ以下ってことに……

　しかしながら、Ｂランクに圧倒されるなどよくあることだ。彼女でさえそうなのだから、彼女より下となるとまるで勝ち目がない。

　頭を振る。

　倒れたことで脳震盪を起こしかけている。

　よろける。

　それでもあきらめない。

「はは、ふらふらじゃん、無理するなよ。女なんだから」

「何が……女だからよ！」

　踏み込む。

　渾身のパンチを放とうとする。が、足がもつれる。

「あ」

　それでも手を伸ばす、何とか。だが、顔面を狙ったパンチは全く外れ、腹にも当たらず、その下にパシっと掠るというか、ぶら下がっているモノを暖簾のように押して通り抜ける形になる。

　パンチというより、倒れる途中で手が当たっただけ。

　攻撃とも呼べない。巨乳から廊下に倒れ込む綾子。

　有坂は目を剥き、叫ぶ。

「あがっ！」

　ヘコ、と腰を引き、股間を押さえて内股で股間を押さえる。

「く、ふぐううう、こ、ここはああ」

「ひ」

「やべえ、玉に……」

　周りで見ている男子らが真っ青になる。

　他人事ではないだけに、一瞬で状況を飲み込む。

　女子たちは他人事だけに、かすっていった程度なのに急に苦しみだす有坂に一瞬呆然とし、ついで理解する。

「ちょ……白浜選手、まさかの金的パンチ！」

「ぎゃはははは！　今のマジで当たった？」

「ふんぐううう！」

「苦しんでます、有坂選手苦しんでます！　苦しんでまーす！　ボールにパンチが当たった模様！　ぶふっ、ぼ、ボールパンチで苦しんでますっ……」

「ううう……あれ？　え、うそ、今のパンチ……」

膝立ちになる綾子。

拳を見る。

「当たったことは当たったけど……ほとんど力入ってなかったよ、っていうか倒れて当たっただけ」

「く、くううう、た、玉は反則、反則だろ……」

レフェリー兼実況役の女子を見る有坂。

見られて、頷く女子。

「ぷっ、ぷぷっ、もちろん金的攻撃は禁止です。ナノメカでタマタマぐらい治るとはいえ、試合ですからね。タマタマ攻撃は無し。男子に一方的に有利なルールですが……まあね」

ナノテクノロジーが発達し、手足が吹っ飛んでもナノメカ入りの薬一粒で簡単に治る世界である。

当然、睾丸の一つ二つ潰れても秒で治せる。

それもあって、女子らにとって金的攻撃は本来以上に他人事で、笑いをこらえるので必死である。

これが、玉が潰れたら終わりという時代ならば「内臓破裂」の可能性がちらつくとそうそう笑って

もいられない。いや、今のは軽くだったので、やはり笑っているか。

「大変ね、今のでダメージとか」

「本当、お気の毒」

　口先ではなんだかんだ言っても、顔は笑い、動けない有坂をニヤニヤして見るばかりの女子たち。

　有坂だけではない、周りで青ざめている男子らも「お前らも同じのついてる弱者なんだろ？」といわんばかりの目線を向ける。

　向けられた男子らは、なんとなく恥ずかしくなってうつむくしかない。

「あはは、金ちゃんに当たるとか、マジかわいそう。知らんけど」

「でもまあ、ねえ」

「女子倒してポイント稼ごうとか考える男らしくない男なんて、おキンキンやられたほうがいいのよね」

「そうそう、どうせ潰れたってすぐ治るんだし」

「ふう……私、もういけるけど」

「ま、まてよ……まだ、玉が……」

「えー、本当に軽く当たっただけだよ？」

「それでも痛いんだよ」

「へえ」

　首を傾げつつ、ニヤニヤして近づく綾子。

　息をのむ美少女であり、スイカップである。

　それが顔を近づけてくれば胸が高鳴る。直前に食らった金的で眩暈や吐き気がする状態であるとはいえ。

　その有坂の耳元でささやく綾子。

「ほんとに弱いのねー、キ〇タマタマタマ、玉コロゴールド二個セット」

「なっ」

　顔を真っ赤にする有坂。美少女からのまさかの金的煽り。

　反応ににんまりする綾子。

　――あは、面白いわ。

「痛いのはおキンキンだけ？　ポコチンくんはいいの？　そっちは頑丈？　全然わからないわー、私女の子だから、お股に臓物付いてないし……キ〇タマタマタマ、キ〇タマタマタマ、まだ痛い？　まだ動けない？　あんなのでそれじゃ、普通に攻撃されたら一発じゃない？　反則になるわけよね。っていうか、タマタマ攻撃禁止でなければ、女の子が簡単に勝てるんじゃないの？」

小声で、有坂だけに聞こえるように煽る。

美少女が自分にだけ淫語をもって語り掛ける状況に、恥ずかしさと妙な興奮を覚えて震える有坂。

「く、く、おま、ふざけ……」

本当に軽くなので、時間が空いたこともあり何とか動けるようになる有坂。

手を綾子の胸倉を掴むように動かす。

と、それと入れ替わるように、自分の体を壁にして、周りに見えないようにポンとオープンフィンガーグローブを付けた掌で有坂の股間を覆う。

そして軽く握る。びくりと震え、動きを止める有坂。

「はうっ、ちょ」

「うふふ、実戦なら今のはパン、って押し潰すように打ってさ、コレ、握り潰しちゃえるよね。してあげようか？　金ちゃん握り潰し」

「じょ、冗談は……」

「いやいや、タマタマ潰れてもすぐ治るんだから、理由があれば女の子はね、キ〇タマの一つ二つ三つ四つ握り潰すぐらい平気なのよ？　試す？　試す？」

「やめ、信じる、信じるからやめて」

頑丈さでも筋肉でも、背丈以外あらゆるフィジカルで圧倒していた有坂だが、こうなっては身動き取れない。

――ち、畜生。汚ねえ。男同士なら玉の握りあいで互角にできるのに、こ、こいつついてないから……っていうか、だから遠慮なく握ってくるんだな、汚ねえよ女は。きゅ、急所が、股間に急所がないとか、ずる過ぎる。

「っていうか、有坂……女相手なら勝てるとか、女見下してない？」

「そ、そんなわけない……」

もちろん**心から見下している**。が、女に睾丸を握られた状態でそれを肯定する男などいるわけもない。

が、そんな答え綾子は聞いていない。

さっさと話しを進める。

「絶対見下してるよー」

「し、してねーよ！　これだから女は頭がパーでマ〇コパワーがなきゃゴミなんだよ」

「だからそれが見下してるっつーんだよゴラア。これは許されませんわ……ってわけで、これから有坂くん、あなたの……**睾丸を潰します**」

「や、やめ」

「あ、女だと思って逆らったわね？　片金で許そうと思ってたのに。そういう態度なら……両睾丸を潰します。両睾丸を潰します。あなたがそのお股に大事にぶら下げてきた、左右の睾丸潰します。二個ともコーガン潰します」

「ま、まって」

「はい、ぐちょー！」

「ひぎっ！」

耳元で小声で叫ぶ器用な綾子。ギュム、と優しく肉袋を握り締める。

そして、すぐに放し、離れる。

握り潰された、と思い込み、その場に膝をつく有坂。

「はぐ、はぐ、あ、いや」

しかし、すぐに脅しだと気づく。

その有坂に背を向ける綾子。

「レフェリー、彼、まだ金の玉が痛すぎるみたいです」

「やだ、どうしよう？　いやいや、金的攻撃の後で、戦闘不能だから……悪いけど……」

「あは、もちろんわかってます。私の負けですね」

「ごめんね。あんな攻撃しやすいところについてる弱点攻撃しちゃダメとか、男に一方的に都合のいいルールで私も納得いってないけど、ルールだしね……というわけで」

廊下の真ん中に移動する。有坂の手を取り引っ張る。

「あ、ちょ……」

「本当によろよろだねえ、あんな軽い一発で……ぷっ、こんなのが勝者……まあ、ルールだからね」

笑いをこらえる。

周りでも、女子たちは噴き出し気味だ。

「ちょっと、有坂の勝ちになるみたいだよ」

「動けねー勝者とか意味不明で草」

「まあ、おキ〇タマは急所だからね」

「あ、こいつキ〇タマつった！　ぎゃはは、上品な私にはまねできないわー、キ〇タマとか口に出すとか」

「あんたも言ってんじゃん！　ぎゃははは！」

　妙にテンションの高い女子たち。

　――みんな楽しそう。そりゃそうよね、いつも威張ってる男子が、タマタマに一発食らってこのざまなんだから。女子倒して点数稼ごうとするクソ男子ならなおさら。あーあ、試合、金的有りルールにならないかな。でも、理事長先生男の人だし。まあ、いい人なんだけどね。私らのこと、全然エロい目で見ないし。

　一様負けたが、横で内股で歩く男を見て自分が負けた気は全くしていない綾子。

　間にレフェリーが立ち、両者の手を掴む。

　そして金的ダメージから抜けられない有坂の手を上げようとして、股間を押さえているのに気づく。

「ちょっと、力緩めて」

「あ、ああ」

「それじゃ……勝者、有坂選手！　おキンキンへの攻撃が入ってしまったことによる対戦相手の反則負けです！　動けないけど勝者！」

「おめでとう！」

「男らしい勝ち方！」

「女には無理な勝ち方だよねえ、タマタマついてないし」

　どうせ女子は負けるとみていた女子たち。実際に負けた。

　しかし妙に楽しげである。男子らは浮かない。男子が勝っても喜べるカードではないが、同じ男が金的をやられてフラフラの状態では居心地が悪すぎる。

体験版終わり

この後、まさかのルール変更で金的が解禁され、女子たちの反撃が始まります

続きは製品版でぜひお楽しみ下さい